Ｇ－２衣食住の衣

779. 着るということ

インドネシアのバティック(→926)やイカット(→928)の伝統工芸品である染織の収集品が時たま展示される。これらの作品を見ているうちに衣類は何のためにあるのかと考えた。我々が衣類を着るのは夏は直射日光から、あるいは冬は寒風から、要するに寒暖風雨から身を守るためであることは明らかである。従って衣類の機能がこれだけの目的であるなら繊維からなる材料の布だけで十分である。

しかしインドネシアでは一枚の布に手間と時間をかけて染織を行う。手書きのバティックは数ヶ月、グリンシン(→929)という複雑なイカットは政策に数年かかるものもある。人がこれほどまで根気をもって染織を行うのは美しいものを作り出すという芸術的な願望もあろうがそれだけではない。衣類と人類の関わり合いにはもっと精神的なものがあるということに気がつく。

目に見える邪悪は手や武器で払いのけることができるが、大きな災害、病魔のような悪霊は目に見えないだけによけいに恐ろしい。人は悪霊から身を守るためにイカットやバティックを着る。衣類はお守りであり守護神でないだろうか。

家宝として衣類は大事に保管され、儀礼の時に取り出される。生誕、婚礼、王の即位の儀式に着る。ジャワの結婚式で着るバティックは花嫁花婿の模様と両親の模様は異なり、模様には人生の教訓の意味がある。東インドネシアでは母は娘のためにイカットを織って嫁がせる。

そして人生最大の儀礼が葬儀である。葬儀で有名なトラジャ人(→618)でイカットは葬儀の主役である。トラジャ人の死者の安置される部屋はイカットで覆われる。スンバ島(→220)では黄泉(よみ)の国に旅立つ死者はイカットに何重にもくるまれる。

インドネシアは染織の宝庫である。民族の多様性を反映して染織文化も多様性も驚くばかりである。インドネシアの染織は単なる風土の所産と思っていたが、実は民族の芸術的所産であり、精神的所産でもあることが分かった。

熱帯気候では裸でいても生きていける。しかし町を歩いていても、事務所にいてもインドネシア男性は日本人に比べて身ぎれいにしている人が多い。家に帰れば日本人のようにランニングシャツにステテコ姿になるわけでもなさそうだ。

日本人男性は仕事をする時は少々古くてもその仕事に応じた服装で全く問題にしないが、インドネシアの男性は女性のように身なりにとても気を使う。仕事のできばえよりも自分のみてくれの良さを誇りにしているようにも見える。

インドネシア人の身奇麗な服装はイスラム教徒の戒律、ジャワ人の礼儀正しさに由来するが、衣類は悪霊からの防具であるという潜在的な信仰がありそうに思う。

780. 民族衣装から洋装へ

インドネシアに限らずタイ、ミャンマー、スリランカに共通している民族衣装はサロン（次項）という腰布である。

しかし最近では洋装の普及が日々進展しており、特にジャカルタのような大都会では衣装から見るかぎり世界の他の都会とほとんどかわらない。キリスト教徒のマナド人(→620)は圧倒的に洋装である。

また洋装は若い人ほど多く、男性の方が転換が早い。日本の明治以降の和装から洋装への移行した際も同じであったということは洋装化の世界共通の現象らしい。ジャカルタの近代ビルのオフィスではインドネシア人もワイシャツにネクタイ姿である。然るべき地位の人は長袖である。インドネシアで袖まくりは無作法である。このためオフィスビルでは冷房が利きすぎで屋外の気温に合わせた服装だと寒くて震える。

インドネシアの伝統衣装も形を変えて残っている。バティックの長袖のシャツはインドネシアの正装である。テレビに写る偉い人は皆バティックの長袖を着ている。腰下は伝統のサロンではなく、ズボンであるから折衷のフォーマルウエアである。

庶民の男性の日常の服装はバティックの半袖である。こちらのバティックはデザインがバティック模様というだけで、プリントによる大量生産のものである。若い人はスポーツシャツ姿も見られる。都会の若い女性は色が鮮やかな原色の洋装である。

女性衣装の洋風化は二手に分かれる。一つは東京やニューヨークと同じ西洋風の若い女性である。身にピッタリと纏えば日本人より手足は長くスリムなのでスタイルはよい。二つ目はドハドハのワンピースである。ドハドハは体の線を分からないようにするイスラムの教えに従ったものでジルバブ(後述 786)を被るのと同じである。ドハドハのワンピースはイスラム教徒の伝統衣装ではなく洋風の衣装をイスラムに合わせたものである。

女性の正装はクバヤ(→781)とカイン姿であり、民族衣装の色彩が濃厚である。ブタウィ人(→690)の洋風を取りいれた風俗が今日のインドネシア女性の共通の衣装になり、本来多様な民族衣装も一つの型に収斂化してきたようである。中年の婦人の地味な民族衣装の仕事着は日本のモンペといったところであろう。

東インドネシアを旅行すると【何とか学園】という日本の学校の校名入りのジャージーを着たインドネシア人に出会い、さては日本の学校の OB かとびっくりすることがある。実は日本の古着である。そのような流通チャンネルがあるらしい。

熱帯の国であるインドネシアでは衣服も簡易なものであるが、こざっぱりした身奇麗な格好をしている。貧しい人は貧しいなりに身なりに気をつかい、乞食も汚すぎると貰いが少ない。マンディ(→803)が好きなことと通じるであろう。

この点、華人は中華料理のオーナーのように金のある人でもランニングと半ズボン姿で汗をかいている。半ズボン姿を忌避しているプリブミ(→680)にとって華人はベチャ引き(→859)以下の格好で平気な人種である。華人はパジャマ姿で平気で近所を散歩する。華人がプリブミに軽蔑される要因の一つは服装に無頓着なことである。

781. サロンとクバヤ

クラトン(→121)で男性の民族衣装姿を見るとスカート風の下半身に特徴がある。伝統の服装は「サロン

（sarong）」という。サロンはインドネシアに限らずタイ、ミャンマー、スリランカに共通[1]している筒状に織り上げた布の民族衣装である。1m×2.5m のバティック製(→926)の布で男も女も腰に巻き付ける。

インドネシアの伝統衣服は製縫の工夫はなく、布を身にまとうテクニックである。人の腰回りから大きめであるから余分の部分を折り曲げてずり落ちないように固定する。足までの長さは蚊除けの効用がある。夜になって冷える時には寝袋になる。

男性の場合、サロンは小用の際に不便である。日本の袴のように捲り上げられないからやむをえず屈む。[2] インドネシア人が日本人をカサル(→634)と思う理由の一つに立ち小便がある。インドネシア男性はズボン姿になっても便所以外の所で立ち小便することはないのはサロンの伝統を引き継いでいるのだろう。

小便の仕方は生理的なものか文化的なものかという疑問である。もしインドネシア人が屈んで小便するように文化的なものであるとすると、牡犬は片足を上げて小便するが、牡犬に衣類を付けて訓練すれば屈んでするだろうか？。犬を連れた散歩姿は日常風景であるが、犬が電柱に小便をかける風景が少なくなった理由は何だろうか？

語るに落ちる小便の連想で申し訳ないが、『師は立ち小便、弟子は走り小便（Guru Kecing Berdiri、Murid Kecing Berlari）』とは品のない表題の書籍であるが、副題『スハルトからハビビへ』を見れば納得する。スハルト大統領が辞任してハビビ大統領になったが、両者の汚職体質は変わらないことを告発したアディチョンドロ[3]の書である。同じ悪いことをするのにも師の居座った様と弟子の落ち着きの無い様を風刺した絶好の表題である。

女性の伝統衣装も下半身はサロンまたは「カイン（kain）」という布を巻き付け、上半身は「クバヤ（kebaya）」というブラウスのようなものを着用している。その起源は西洋人の着ていた上着にある。イスラムの浸透と期を一にして西洋人が現れた。彼らの服装を取り入れたのがクバヤである。花模様などが鮮やかなパシシル地方(→136)生産のバティック布に刺繍がついている。クバヤの胸元が気になるが、併せるピンに見えない工夫がある。

下半身はカインという布からなるスカートである。腰を帯で締め、体の線を強調する。これらの鮮やかな染織は何れもインドネシアの誇る伝統工芸である。「スレンダン（selendang）」という肩掛けをアクセサリーにする。スレンダンは伝統の染織の逸品である。クバヤ、クバヤとカインとの配色の組み合わせにマッチしたスレンダンが着る人のセンスを表す。女性がスレンダンを外すことは裸になるほどの意味を持つ。外したスレンダンを男性に掛けることは女性からのプロポーズを意味する。

そもそもインドネシアに限らず東南アジアの女性の服装は下半身は布で覆うが上半身は裸であった。ボロブドールの遺跡に残された古代の女性の姿はアンコールワットと同じように豊富な胸を露にしている。イスラム教の浸透に伴い上半身を覆うようになった。

---

[1]東南アジアでは一般にロンジーとして知られる。

[2] <編者註>サロンをまくり上げればどこでも立小便ができる。座り小便はイスラムの教えである。テヘランの駅には立ち便器がなかった。

[3]アディチョンドロ（GeorgeJunusAditjondro1946－）社会学者としてスハルト大統領の蓄財問題、東ティモールを批判する論文を発表し体制側の圧力で 1995 にインドネシアを離れ、オーストラリアのニューキャスル大学に移った。2002 年帰国し、現在は原子力発電を批判の活動を行っている。

782. バティック･シャツ

インドネシアでは伝統文化の継承と保護を兼ねてバティック・シャツがフォーマルウエアとして愛用されている。もっとも男性はバティック生地を西洋のシャツ風に仕立てたものである。下は洋装の普通のズボンであって伝統のサロンではない。つまり“イン・洋折衷”である。

こういう服装の集まりの中で背広とネクタイはいかにも場違いであり、外国人男性もパーティの服装はバティックを愛用している。正装であるから何らはばかるところはない。事実、熱帯では緩やかな着こなしのバティックの方が楽である。

1994 年ボゴールで披かれた APEC の首脳会議(→459)でもクリントン大統領、村山首相を始めバティック姿の勢ぞろいの写真を思い出していただきたい。

熱帯の気候ではスーツのネクタイ姿は苦痛そのものである。バティック・シャツはゆったりとした感じで着心地はよい。日本から出張のビジネスマンも夜のセレモニーのためのバティックのシャツの既製品をホテルの売店で買い求める。

ところでホテルで販売しているバティック・シャツを試着してみると背丈、胴回りがよければ袖が長く手のひらの半分ほど覆う。袖具合のいいものは背丈、胴回りが窮屈だ。西欧のホテルでも同じ体験談を聞いたことがある。

帰納的に結論付けると日本人は国際標準に比べると手が短い。ちなみに手が短いのは北方系蒙古人種の特徴で体熱の発散抑制のためである。低い鼻、細い目も氷河期をやり過ごした耐寒適用の名残らしい。

バティック・シャツといっても本物の由緒ある製法のバティックではなく、プリントものである。デザインがバティック模様であるのでバティック・シャツといわれる。普通の生地は綿であるが、絹製もあり高価である。

バティックとともにインドネシアの伝統染織であるイカット生地(→928)のシャツもある。バティックよりやや割高であるが、日本での着用を考えるとイカットの方が無難である。インドネシアで仕入れたバティック・シャツを日本で着るのは勇気がいる。特にガルーダ(→951)が一面に描かれたものは、銭湯で見ないようにして見たことがある倶梨伽羅紋(くりからもん)の刺青のようである。

インドネシアで正装の場合は長袖であり、日本人の好きな半袖シャツとか西欧人のよくやる長袖の腕まくりをジャワ人はカサル(→634)と思っている。

インドネシア人は服装で人を見る傾向がある。公の場にルーズな格好で現れる人を軽蔑する。ワヒド大統領(→455)は育ちの良さの故、服装にかまわなかった。サンダル姿で記者会見に臨んだこともある。ワヒドの無頓着な服装は国民に嫌われた一因である。罷免された後もパジャマ姿でテラスにたたずむ写真が報道され顰蹙(ひんしゅく)をかった。

⇒926.バティック/伝統染織

783. 制服の風習

ジャワの古都のクラトン(→121)では言葉のジャワ語(→633)と同様に服装についても非常に複雑な規則があり、何か行事の場合はそれに対応する制服が決められている。

インドネシア人の服装で気がつくことは制服が多いことである。制服への志向はクラトンで培われたジャワの礼儀正しさの体質の反映であるかもしれない。ボーイスカウトやガールスカウトが盛んなのも制服姿が恰好いいからであろう。

小学校の制服には数種類ある。フォーマルな行事の日は白のシャツに男子は赤の半ズボン、女子は赤のスカートである。いうまでもなく国旗の色にちなむものである。中学生、高校生にいたるまで学校毎の制服を着ている。イスラム系の学校の女学生は白いヴェールで頭から覆う。制服というよりも宗教の問題である。

国軍の幹部は制服で行動することが多い。インドネシアは軍事国家ではないが、スハルト体制の後遺症で軍服にかなりの威圧効果がある。

インドネシアの制服は学生や軍人に限らない。役所や大企業になると職員には制服がある。制服の理由は社員と社外人の識別という職員の管理上の必要性ということだけではなさそうだ。制服を着ることはその共同体の一員であることの証(あかし)の顕示である。

警察、税関、郵便局などの公務員の制服は公務員に与えられる番号とともに権力の所在の顕示であり、「賄賂をよこせ」という圧力である。仮に日本の公務員が賄賂をよこせという時は制服を脱いで見えない所で小声で言うと思う。賄賂に縁のない職種の公務員もバティックの制服に誇りを持っている。

スハルト政権末期から学生の抗議デモが盛んになった。学校毎のジャンバーの色があり、例えば UI(→746)は黄色、UGM(→120)は土色である。街頭へ学生が繰り出してもどこの学校か分かる仕組みである。学生デモもエリート集団の証明である。

企業での慰安旅行は家族同伴というのが一般的である。その際、幹事がバスを借り切るとか、レストランを予約するとかの前にするべきことは制服を作ることである。慰安旅行当日は、例えば【何年何月何日・バンドゥン旅行記念・〇〇会社】という同じプリントのシャツを参加者全員が着て参加する。

制服といってもシャツであるからそんなに金のかかるものでもない。金銭のことよりも同じ制服を着て群れたがるという精神構造が面白い。

どうもこの辺になるとインドネシア人の国民性の問題らしい。どこかの共同体に属していないと不安になる。水田耕作を放棄して都会へでてきた者にとって精神安定剤に何らかの代りの共同体が必要である。制服とはそのすり替え現象でなかろうか。

インドネシア人の制服ばかりではない。日本の高校生の真黒の襟服は外国人から見ると非常に奇異に感じるらしい。程度の違いはあるが日本人もインドネシア人と同様に制服が好きである。両者には稲作共同社会という共通項がある。

⇒589.日本人との共通性

784. 帽子でないペチ

インドネシア人にとつて頭とは霊の宿る人体で最も神聖な個所で他人に触れさせてはならない所である。子供の頭をサービスのつもりで撫でることはタブーである。しかも不浄用の左手でもやろうものなら親が血相をかえて飛んでくる。

さらにイスラム教では髪の毛を直接に露出させることは不作法である。

従ってお祈りの際には黒い鍔(つば)のない「ペチ(peci)」を被って頭を地面にひれ伏す。ペチは「コピア(kopia)」ともいう。ペチは宗教儀式のフォーマルウエアの印であり、一般にいわれる帽子とはコンセプトの異なる存在である。従って室内、あるいは偉い人の前でも脱ぐ必要はない。

黒いペチはイスラム教徒であることの印である。さらに同じ型の白いペチはハジ(→816)だけが着用できる。大事なものであるからイスラム教の記念日につける。白いペチをつける際には乞食にも気前よく振る舞わなければならない。最近は野球帽などを被る人が増えたが室内でも帽子を着用するのはペチの癖であろう。

ペチの歴史はそれほど遡るわけではない。かつては「ブランコン(belangkon)」という布をターバンのように巻いた頭巾(ずきん)を被った。やがて民族意識の目覚めとともに先駆者はブランコンを民族的伝統というよりは封建的遺物として忌避するようになった。

その代りに導入されたものがトルコが起源といわれるペチである。スカルノ大統領の生涯を写真集でたどるとバンドン工科大学以降はペチになっている。それまでのブランコンからペチへの切り替えは日本でいえば丁髷(ちょんまげ)を切り落とすくらいの画期的なことであり、スカルノ大統領が率先して身につけた。国民はペチ姿の大統領を見慣れていたのでスカルノがペチなしで町を散歩に出かけても誰も気がつかなかった、と自伝で語っている。

ペチの国民的普及により宗教と関係なくインドネシアのフォーマルな服装として定着してきた。例えば閣僚の就任式では全員ペチを被り、キリスト教徒の結婚式でも新郎はペチを被っている

ブランコンも完全に払拭(ふっしょく)されたわけではない。ジャワ王宮のクラトン(→121)ではジャワの伝統に従って今だにブランコンで丁寧に頭を包んでいる。ジョグジャカルタとスラカルタでは巻き方に流儀の差があって仕上がりが異なる。伝統のガムラン(→911)の演奏者、ワヤンを演じるダラン(→874)にはブランコンが似つかわしい。ジャワ人の結婚式で伝統の民族衣装で行う際にはブランコンを着ける。

一般にインドネシア人の帽子は少ないがマナド人(→620)はペチでない一般の帽子をかぶる。東インド会社時代にキリスト教徒には着帽を許してイスラム教徒と区別できるようにしたことの名残である。フロレス島のポルトガル系キリスト教徒のトパセ(→218)は「帽子をかぶる人」が語源らしい。

炎天下の屋外の労働には帽子は仏需品である。このためには鍔の広い麦藁帽子をかぶる。インドネシアには色々なハンドクラフトがあるが、伝統工芸品と思われる麦藁帽子は見かけない。麦藁帽子は実用本位の消耗品なのであろう。

785. チャドルで隠せ

コーランに「信者の女たちに言ってやるがいい。彼女らの視線を低くし貞淑を守れ。外に表れるものの外は彼女らの美を目立たせてはならない。それから、ヴェイルをその胸の上に垂れなさい。自分の夫または父の外は彼女の美を表してはならない」と記されている。

イスラム教では女性の衣服に厳しい制限がある。「アウラット(aurat)」といって肉体で見せていけない所がある。男性より女性が厳しく女性の体は手首から先と顔以外は恥部とされているので隠さなければならない。

このためイスラム教徒の女性は「チャドル（chador）」という伝統的衣服を着ける。

チャドルは身体をすっぽりと包む布である。身体の線も隠さなければならないためダブダブである。中東の敬虔なイスラム教徒の地域では足元まで黒い衣服で覆い、眼以外は覆われる。チャドルは日光の厳しいところではそれなりの効用があるとはいうものの、不意にこのような女性を見かけると烏のお化けのように見えるらしい。

インドネシアではチャドルに代わり、バジュクルン（次項）を見ることがある。また髪を見せないように白い布[4]を頭から被って教会にお祈りに行く。より具体的に以下の指針に従い、敬虔なイスラム教徒の女性は日常でも白い布を被っている。

・薄い生地や体の形が出るような服装はいけない。
・男性のような服装はいけない。
・他宗教の象徴である服装はいけない。
・手首から先と顔を除き、全部の体の部分が表れてはいけない。
・人の目を引くような派手なものはいけない。
・香水などの香りはいけない。
・髪の毛、首を表わしてはいけない。

まるで日本の女子高校の校則以上のうるささである。

女性の衣装と宗教のタブーを象徴する水着コンテスト事件を紹介したい。1996 年のラスベガスでおこなわれたミス・ユニバース・コンテストでのインドネシア代表アルヤ・ロハリ嬢 21 歳の水着写真が掲載されて大騒ぎになった。水着といっても黒いワンピース姿で日本の大正時代相当であるが、インドネシアでは写真を非難するデモ行進があった。当の女性がイスラム教徒であることから敬虔なイスラム教徒の怒りを招いたものである。

結局、大統領がこの種のコンテストはインドネシアの文化・価値観にそぐわないのでインドネシアの女性は外国の大会には参加してはならないと言明することでけりがついた。当のアルヤ・ロハリ嬢は釈然としていないというコメントが英字新聞にあった。

ちなみにインドネシアでも TV 局主催でミスのコンテストはある。各州代表の美女が妍を競う。もちろん水着でなく民族衣装である。通常は複数のジャカルタ代表の中から選ばれることが多い。マナド美人、スンダ美人、バリ美人は全員首都に集合らしい。

786. 女性のジルバブ

イスラム教国であっても湿度の高い熱帯アジアではインドネシアの場合、女性の服装の規範は緩やかで真

[4]最近のイスラム教徒のデモに白衣の女性集団が目立つようになった。女子大生に白衣が流行しており、彼女らは白衣で男性の好奇な視線を避けることができるため自由が得られるとの見解である。彼女らによれば白衣は近代・自由の象徴である。

っ黒のチャドル(前項)を強制するわけにはいかないので、「ジルバブ（jilbab）」いう“頭巾(づきん)”で現地適応を行っている。ジルバブの主旨は毛髪を隠すことである。毛が生えている所は淫らであるといわれれば確かに思い当たる。服もワンピースの妊婦服のようにゆったりとした「バジュクルン（baju kurung）」を着ける。体の線、特に尻の部分の曲線を隠すためである。これもチャドルの代用品である。

バジュ・クルン

1990 年代になってインドネシア女性の都会でのジルバブ姿[5]が多くなった。田舎より都会の方で目立つ。ジルバブを着けていないとイスラム見回団から注意されるそうだ。インドネシア人の信仰心の増してきたというよりは、生活に余裕ができた証だろう。

インドネシア社会へのイスラムの浸透により宗教に覚醒した女子大学生など積極的につけるようになった。公立学校でもジルバブの着用した女学生を見る。当初は禁止されていたが、スハルト後期のイスラム懐柔策の一環として学校での着用禁止が緩和されたのが契機になった。

工場でも作業中にジルバブを被る女性が多い。合弁企業で外国から派遣された管理者としては機械に巻込まれそうなので禁止したいのが本音であるが、宗教がらみ問題であるので下手な対応は労働争議に留まらず宗教争議にエスカレートすることもありうる。頭巾の長さを短めに制限することで何とか折り合いをつけている。

ジルバブを着けているのは敬虔なイスラム教徒であるが、その変形に「クルドゥン（kerudung）」がある。クルドゥンはスカーフのように軽く巻きつけるだけである。一種のファッションの要素がある。キティちゃんの刺繍(ししゅう)のついたジルバブもある。

ジルバブの色はイスラム系の学校の制服は白や灰色が多く、都会では華やか色彩に模様入りもある。ミッキーマウスの模様のものさえあるらしい。基本は黒であり、黒頭巾を着けた姿はアニメやテレビで馴染みの日本の忍者の格好に似てくる。密かに「NINJYA」とよばれるゆえんである。

女性の服装は一方では西欧のモダンな服装があり、もう一方では時代逆行現象のようなジルバブ姿があり、二分化傾向にある。

NINJYA についていえばスハルト政権崩壊後、治安の箍(たが)が緩んだ際に東ジャワでイスラム教関係者が夜中に暗殺される事件が相次いだ。犯人が黒覆面をしていたため“NINJYA 事件”といわれた。犯人については 9 月 30 日事件の際のイスラム教徒に虐殺された共産党関係者の復讐という説もあったが、真犯人と事件の背後は不明のままである。

被り物からの連想であるが、インドネシアの選挙運動でインドネシア人は鉢巻きをすることに気がついた。選挙の出陣とか試験勉強とか、鉢巻きをする TPO が日本と同じであるらしい。ウィンブルドンで鉢巻きの選手をみかけたが、鉢巻きは日本人の慣習と思う。インドネシア人の鉢巻きは固有の文化か、or 日本の占領中に持ち込んだものだろうか。

[5]ジルバブを習慣化すると顔のジルバブで覆われた部分がやけのこるらしい。

787. 装身具と鍵

インドネシア小学生の女の子がイアリングをしているのを見て驚く。しかもピアスである。材質は金である。およそ書店なんぞ有りそうもない小さな町に分不相応な【TOKO MAS(=金の店)】の看板の貴金属店がある。大きな町になると数軒の TOKO-MAS が軒を並べている。もっと大きな町になると Jalan Mas(貴金属店街)といわれるほどである。

要するに TOKO-MAS が多いのは需要があるからである。国民は貯蓄を考えるほど余裕がない。あっても預金による貯蓄の習慣はない。少しでも余裕があれば貴金属に変える。

インドネシアの銀行に預金する人は少ない。金利がいくら高くても、為替の暴落、銀行の破綻で学習成果は 1998 年の経済危機で実証済みである。

貴金属は装飾もさることながら全財産を身に付けておくという彼らの生活の知恵である。経済状態がよければ装身具は買い換えて大きくなる。盗難に遭わないかと気になるが、家に保管しておくと盗難があり、紛失のリスクはより高い。

サングラスの着用は上流階級の証である。最近の上流階級は携帯電話やウオークマンをこれ見よがしにつけている。指輪もインドネシア人が身につける装身具である。結婚指輪は左手の薬指が世界の慣行であるが、インドネシア人を観察した例によると左手は見かけないそうだ。右手と左手の分担(→805)を考えればさもありなんと思う。

インドネシアでトコ・マスと並んで多いことで違和感があるのは錠前屋である。インドネシアで地位の象徴の携帯品は「鍵(クンチ＝kunci)」であろう。

鍵はインドネシア人にとって神秘への入口でもある。鍵をシンボルとするクバティナン(→707)の団体がある。ススフナン家(→131)の紋章は宇宙を開く鍵である。

鍵は権威の証であり、多くの鍵をジャラジャラさせるほど偉い人である。工場で最も沢山の鍵を持っているのが工場長であり、1ダースほどの鍵をジャラジャラさせる。以下部長級は 8 個、課長級 5 個、係長 3 個ほどの鍵を地位に応じて鍵の数が減る。外資系企業の外国人管理職も鍵をジャラジャラいわせている。

家でも冷蔵庫や箪笥(たんす)・机の引き出しの鍵を持っているのが、その家の主婦である。日本人駐在員のニョニャ(奥様)は多い鍵でパニックになる。余り鍵が多いので鍵を入れる箱があるが、その場合でも鍵箱の鍵は持たねばならない。

使用人の居る家で鍵をかけないことは自由に使って下さい、ということを意味する。事務所でも机の鍵をかけないことは文房具などの自由使用を認めることである。電話にもカバーをつけて鍵をかけると受信は可能であるが、発信が出来ないようになっている。私用電話を防ぐためである。

駐在員のニョニャがプンバントウ(女中)を信頼している証に鍵をかけないことを試みたが、プンバントウは困惑したという。彼女らは鍵のかけてないことから生じる紛失の責任を負わされてはかなわないからである。

788. 日傘/権威のシンボル

赤道直下の頭のてっぺんから照り付ける日差しは厳しい。日射病で倒れるから帽子は必需品である。炎天

下で日陰を作るために伝統的な道具は日傘である。インドネシア語で「パユン（payung）」という。炎天下の広場の屋台の店には竿の先にコウモリ傘が括り付けてある。日本でいう日傘という柔なものは実用的でない。

生活の小道具であるパユンが儀式のシンボルであること、貴人の存在を周知する資格とし権威の象徴に高まったのはインド文化の影響であろう。貴人が外出する時はパユンを差しかける従者が従った。国王には黄金色のパユンが用いられ、身分に従い黄金色の割合が異なる。形も複雑化し 5m の棒に3段のパユンがある。植民地時代のオランダ人行政官最高位の理事[6]には金色のパユンを差し掛けられた。

馬車で外出するようになると座席の後ろにパユンを持った従者が立っていた。マハーバラタのパラダユダ(→947)の決戦のワヤンでは闘将の一騎打ちが次々に繰り出される。総司令官は日傘のある馬車で登場することで判る。王宮の博物館で保存されている馬車には屋根を傘の形にしたものがある。

王様の乗り物に自動車が導入されるとどうなるか。オープンカーであればとにかく車の屋根にパユンを取り入れた乗用車の設計はないであろう。そこで苦慮の策は自動車のラジエイターのマークをパユンにすることである。これはクアラルンプールで見かけたものであり、インドネシアに実在するかどうかは確かでない。

傘の実用性はなくなり、権威のシンボルとなる。バリ島のお祭りの行列にパユンを持った人がいる。別に特定の者に差し掛けるものでなく、単なる行列の装飾品である。寺院のお祭りに門の左右にパユンが立てられる。旗と同じ存在である。トラジャの葬式の行列の先頭には竿の先にパユンがある。

クラトンでは「ガレベッグ（Garebeg）」という王宮の宗教行事がある。王家のプサカ(→704)のガムラン楽器が深夜に運ばれる儀式から始まる。プサカ護持の威儀を正した深夜の正装の行進にパユンが差し掛けられている。深夜であるから日差しはないが、パユンはプサカの所在場所を示している。

クラトンではスルタンの昼食は厨房で作られて食堂まで運ばれる。距離は数 10m の間に昼食にもパユンをかけて歩く場面が TV で紹介されていた。

庶民も割礼とか結婚などハレの日がある。行列を組んで皆に披露する。その際に主人公には傘がさしかけられる。ただし庶民であるから用いられるのは黒いコーモリ傘であることがユーモラスである。

日本の皇室の大嘗祭で現人神に傘が差しかけられる。ところで日本の寺にある仏像の頭上を覆う天蓋は埃除けではなく日傘が起源であり、仏教が熱帯からの渡来であることの痕跡であろう。段重ねの傘を見て思い付いたが、日本の古刹の三重塔・五重塔の起源は尊いものを覆う天蓋のイメージでなかろうか。

[6]植民地時代の理事州の理事官は行政権と司法権を持つ最高権威者である。新理事官の交替儀式は一大ページェントであり金糸縫いの制帽・制服に身を固め、日傘をさし掛けられて儀式に臨んだ。

789. 履物の普及

インドネシアを含め東南アジアでは履物は神々かそれに類する人がつける物であった。西欧人の真似をして靴をはいた原住民が生意気だとして西欧人から暴行をうけ警察沙汰になったのは 20 世紀初頭のバンドゥンでのことである。ジャワ農民は靴を履いた人を鉄砲や大砲並みに恐れた[7]。

最近では日本の発明というゴム草履が普及している。下駄(げた)、草履(ぞうり)、足袋(たび)のように日本人の履物は足の指先が割れており、今やゴム草履は東南アジアの風土に溶け込んだ履物となっている。田舎でも裸足(はだし)は少なくなり、ゴム草履を履いている。時には裸足の子供も見かけるが、熱帯の気候であるから貧しいというより健康という感じである。

ワヒド大統領(→455)就任の記者会見が自宅で行われた際に大統領がゴム草履で外国記者団の前に現れた時にはさすがに記者連も唖然とした。

衣服の質は遠目に見ただけでは解らないが、履物は履いているかどうか一目で解る。その国の国民生活状態を、①ほとんどの人が裸足、②裸足と履物が混在、③ほとんどの人が履物、というクライテリアで区分するのは単純明解である。かつては①であったが、現在のインドネシアは田舎では②、都会では③ということになる。

田舎では裸足の農夫が炎天下の舗装道路を歩いているのを自動車でやり過ごす。かつて農夫が裸足で歩いていた道は文明の名の下に自動車のために舗装された。足の裏を焼かれる熱さであろうと忸怩(じくじ)たる思いである。

ジャカルタのオランブサール(orang besar＝偉いさん)の邸宅でのパーティのボーイは裸足である。この場合、裸足は客人への敬意の表われとなる。

ビジネス客の多いジャカルタのホテルは別としてホテルの従業員は裸足である。ジョグジャカルタのクラトン(→121)で働く人は昔ながらの服装であり裸足である。イモギリ(→123)の霊廟参拝は裸足でなければならない。日本人にはそれほど抵抗はないが、裸足の習慣のない西洋人はかなり抵抗を覚えるらしい。

インドネシアの僻地では履物なしで野山を歩き回る人もいる。これらの人の足の指は開いている。このような足をカキ アヤム(kaki ayam＝鶏の足[8])という。健康な足の証拠であろう。

朝鮮語で「チョッパリ」というのは日本人をののしる言葉である。語源は「ひずめのように割れた足」という意味である。朝鮮半島の文化には下駄(げた)、草履(ぞうり)の類はない。遊牧系の朝鮮人と水田農耕系の日本人の間の壁が海峡を挟んであるようだ。

そういえば日本人の足の指も退化している。特に小指などは横を向いて奇形になってきたのは日常生活から下駄が消えたからである。靴も一種の纏足(てんそく)である。

インドネシアで全国の小学生に靴をはかせようという運動があった。その主旨はたいへん結構であるが、スハルトの孫の会社が靴の納入を独占するという興ざめな話はその後どのようになったことやら。

⇒801.階段・玄関・床

---

[7]プラムディアの「すべて民族の子」にジャワの農民が砂糖会社の社員の靴に異星人に会うような恐怖におびえる様があつた。日本占領当時の中国人が日本人の下駄の音への恐怖を記した小説がある。

[8] 〈編者註〉本当の鶏の足は Cakar ayam という。

790. コテカ/ペニスケース

イリアンの高地パプア人の衣装は男は「コテカ(koteka)」であり、女は腰蓑だけである。コテカは英語でペニスケースという男性専用の筒である。あえて日本語は割愛する。

コテカを衣装というのはおかしいが、他は素っ裸であるから唯一の身にまとっているものである。川を横断中にコテカを流された男が陸に上がらないので理由を詮索すると恥ずかしいからと言った。コテカがないことは素っ裸と同じことらしい。

コテカは「ホリム(horim)」という皮の薄い瓜の実をくり抜いたものである。長短太細さまざまであるが普通は長さは 30 ㎝くらいで某所の竿の部分を覆う、中身の長さとは関係ない、念のため。社会的地位に応じて長さが異なるという部族もある。また着用したコテカは勇ましく立っている。これは腰の周りからの紐で支えているからである、これも念のため。偉くなると先端にひだのような装飾がつく、あるいは着色したりする。部族によって、慣習によって色々なものがあるようである。

特大のコテカを着用しているのは煙草などを容れているということであるからポケットの機能も兼ねている。紙幣もコテカに巻き付けるから財布でもある。コインをもらうと所持方法に困惑するらしい。

ニュー・ギニア島は赤道下でも高地では夕方になると冷え夜になると寒い。ワメナ(→239)では5℃程度に下がるので、彼らの住居では夜間は暖房のため火を焚く。コテカだけではフアッションはとにかく防寒の方が心配であるが、体に塗りたくる豚の脂が保温効果があるらしい。彼らにはマレー系民族の慣習であるマンディ(→803)の習慣がないので着たきりということになる。

最近はイリアン高地へも観光客が行くようになった。見せ物はブタ祭りなど伝統舞踏である。頭には極楽鳥の羽根で飾る。鼻には豚の牙をはめ込む。下半身はコテカ姿が正装である。人間の持つ原始エネルギーに圧倒されるらしい。

しかしこのコテカの着用も文明の接触によって次第にすたれつつある。ワメナでは本多勝一著『ニューギニア高地人』(1964 年)の頃は全員コテカであった。有吉佐和子著『女二人のニューギニア』(1969 年)によると彼女がパンツを縫うてやったので彼らはパンツを愛用するようになったと誇っている。

果たして最近の飛行場や市場の写真を見るとパンツと上着姿がかなりいる。観光地化するにつれコテカ姿も観光客の写真用だけになるのも時間の問題であろう。イリアン人もパンツを付けるようになってからコテカはもっぱら人気のある土産物専用になっている。

コテカだけの男性に対して女性は腰蓑だけで上半身はトップレスである。材料はよりひもと木の皮のである。首長と結婚した米国の女人類学者の突撃的体験レポートによるとチクチクとしてむず痒(がゆ)かったそうである。

⇒627.ニューギニア高地人